

森と海からの手紙

★5便★

「もう一度、長崎のヤマと海を見たいとよ」
今年正月に卒寿を迎えた母の思いに、一念発起。この夏、マイカーに母を乗せて、90年刊の人生をたどる旅に出た……。

岩手県釜石市

長崎県佐世保市



長崎・佐世保

故郷で母の人生たどる

働く者と家族にとって、「ヤマ」とは炭鉱をさす隠語だった。

熊本県の農家の7人兄妹の末に生まれた父は、学徒動員世代で、現在は長崎県佐世保市に統合された旧北松浦郡の炭鉱に職を得た。

そこは、炭鉱が連なり、採掘で出たガラを積み上げた「ボタ山」が点在していた。

母は、その一角で小さな炭鉱と置き屋や芝居小屋を営む家の5男5女の末の娘で、高等女学校2年で敗戦を迎えた。教員不足の中、

10代半ばで小学校の代用教員となり、20歳で結婚。戦後10年の1955年に、私が生まれた。

「炭住」と呼ばれた炭鉱労働者の社宅の背後にある高台に登ると、眼下に九十九島の海が広がっていた。

「もはや戦後ではない」と経済白書が記したのは、56年。「原子力基本法」が国会で成立した翌年のことだ。広島、長崎への原爆の記憶が生々しかったが、「原子力の平和利用」という宣伝文句に国民の反発は少なかった。

55年から64年の昭和30年代は、「燃料革命」も進み、エネルギー源は石油が石炭に取って代わった。石炭産業は斜陽となり、父の炭鉱も閉山を決定。東京オリピック前年の63年に、「鉄の街」と呼ばれた岩手県釜

石市内の釜山に転居した。私が小学3年生になる春だった。

旅立ちの日、駅には親戚や知人が見送りに駆け付け、涙の別れとなった。列車と汽車を乗り継いで3日かかり。みちのくは、はるかあなたにであった。

途中で立ち寄った東京は、五輪に向けて、高速道路やビルの建設の槌音が鳴り響いていた。行き交う人々は若さと活気にあふれ、

ラッシュ時の人波にはめまいを覚えた。新天地の釜石の駅に降り立つと、駅前には要塞のように製鉄所の建造物が連なり、溶鉱炉の巨大煙突群が立ちほだかっていた。製鉄は、高度経済成長を支える基幹産業だった。

2022年の夏の旅は、梅雨明け直前にスタートした。東京を出て3日後、たどりの着いた炭鉱町は炭住も消え、ボタ山も緑に覆われて見分けがつかなくなった。高齢化と過疎化が進み、川辺や海辺からは、子供たちの笑顔と歓声が消えていた。

「今は、子供だけで川や海で遊んじゃダメらしく。気象変動のせいか分からんばってん。鯉や白魚もおら

戦地からの手紙に思いはせ

「んごつなつた」。母の生家を継いだ従兄は言った。5人の兄弟と3人の姉はすでに先立ち、その墓参りを続けた。認知症で入院中の92歳の姉とは、コロナ禍の中、ガラス越しの面会を果した。「姉さんと、目果が合ったと。きつと、私が分かったとよ」。母は、小さな笑みを浮かべた。

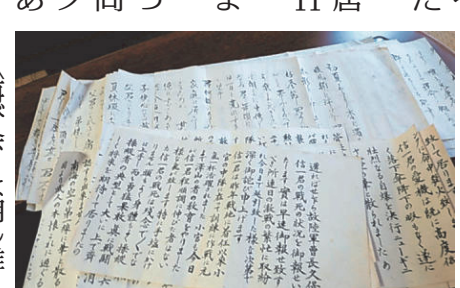
女学校があった平戸島で、海を望む高台の公園を訪ねた。そこは、父と母が初めてデートした場所、父が存命中の04年に、私も両親を伴って立ち寄ったことがあった。

母の生家で、戦死した母の長兄から両親宛てに届いた手紙を見せられたのは、公園を訪ねた夜だった。戦闘機乗りとして、ニューギニアで空中戦の後に自爆した長兄の手紙には、戦地に向かう胸中が記されている。



両親がデートした平戸島の公園に立つ母。背後に平戸大橋と平戸城が見える—長崎県平戸市で

長崎には1週間滞在し、父の故郷の熊本本の親戚回りをさらに1週間続け、夏本番を迎えた東京に戻った。「これが最後の故郷かと思うと、寂しかばってん。お父さんへの土産話ができてよかった。今度は、釜石にも行ってみたいかね」。帰路、母が残した感慨だ。実現できればと思っ



母の長兄の戦死を告げる上巻からの手紙—長崎県で

【委員編集委員・萩尾信也】
毎月第3火曜掲載